洋０７－１５６

「インランド・エンパイア」

２００７（平成１９）年６月２９日鑑賞＜角川映画試写室＞

監督・脚本：デイビィッド・リンチ
ニッキー・グレース、スーザン・ブルー／ローラ・ダーン
キングスリー・スチュワート監督／ジェレミー・アイアンズ
デヴォン・バーク、ビリー・サイド／ジャスティン・セロー
フレディ／ハリー・ディーン・スタントン
マリリン・レヴィンズ／ダイアン・ラッド
ＴＶ番組のアナウンサー／ウィリアム・Ｈ・メイシー
ドリス・サイド／ジュリア・オーモンド
ジェーン／ローラ・ハリング
黄色いドレスの女／ナスターシャ・キンスキー
スージー／ナオミ・ワッツ（声だけ）
ホームレス／裕木奈江
角川映画配給・２００６年・アメリカ映画・１８０分

＜はじめて知ったデイヴィッド・リンチ監督とは・・・？＞

プレスシートやネット情報によると、１９４６年生まれのデイヴィッド・リンチ監督は、①１９９０年、『ワイルド・アット・ハート』でカンヌ国際映画祭のパルム・ドールを受賞、②２００１年、『マルホランド・ドライブ』でカンヌ国際映画祭監督賞を受賞、③２００６年、第６３回ベネチア国際映画祭にて映画人として長年にわたり多くの優れた作品を生み続けていることを称える栄誉金獅子賞を受賞、したことで有名とのこと。

残念ながら私はそんな彼の名前を知らなかったが、『エレファント・マン』（８０年）の監督だと聞いて、やっとイメージが少し湧いてきた。しかし、そんな私のイメージは、この『インランド・エンパイア』を観て粉々に砕かれてしまった。デイヴィッド・リンチをデイヴィッド・リンチたらしめているのは、何よりも彼の特異な作風らしいが、それは彼の最新作であるこの『インランド・エンパイア』において明らか。

プレスシートには、彼が一貫して「女性」を描いてきたことを称して、「リンチはちょっとねじれた形ではあるが、女性を愛している。いや、女性というフィギュアを愛しているのかもしれない」と書いているが、他方、彼の特異な作風に関しては、「内容が分からなかったって？それが、リンチを理解したってことなんだぜ」と書いているからすごい。そこまで言われたら、私がこの『インランド・エンパイア』を観てサッパリわからなかったと告白しても、それほど恥ではないのかも・・・？

＜５つの世界が交錯する物語・・・？聞きしに勝る難解さ！＞

この映画のプレスシートには「ハリウッド⇔ポーランド、現実⇔映画、そして、ウサギ人間たち。５つの世界が交錯する」と書かれている。たしかに映画を観れば、それらしきことは何となく・・・？

またストーリーは、①ハリウッド女優ニッキーは新作で再起を狙うが・・・。②映画『暗い明日の空の上で』のスーザンの、愛とトラブル。③ニッキーが「ビリー」にかけた電話を、ウサギ人間が取る。④ロスト・ガールは、ニッキーと邂逅する。⑤映画『４７』でも、二人の女が愛とトラブルを抱えている、と５項目に分けて紹介されている。これも、そこに書かれてある文章は言葉としては理解できるが、映画を観てもその脈略はサッパリわからない・・・？ふつうは、事前にプレスシートを読んだ時はサッパリ分からなくても、映画を観ればわかるものだが、この映画だけは別・・・。

「何を言っているんだ！俺は当然理解できるゾ！」と言うあなたは、是非チャレンジを・・・。そんな風に意気込んでいる人ほど、よけい迷宮の中に放り込まれてしまうのでは・・・？

＜なぜ、１８０分という長時間に・・・？＞

最近のハリウッド大作は２時間半近くのものがあるが、３時間という長い映画はまずないはず。この『インランド・エンパイア』は、ＤＶカムコーダーＳＯＮＹ　ＰＤ－１５０（家庭用モデルの業務用後継機）を使って撮影したものがたくさん含まれているから、決して大作とは言えない映画。しかし、それにもかかわらず、上映時間がきっちり３時間というのは一体ナゼ・・・？

プレスシートによれば、それは、「興が乗ったリンチは全体の脚本を書かないまま、ロサンゼルスで、ポーランドで、その都度、好きなシーンの脚本を書き、それを撮っては、撮影中に浮かんだアイディアを次に撮る―その繰り返しで、３時間の大作になったというのである」と書いてある。「撮りながら考える―その繰り返しで、１８０分」・・・。おいおい、そりぁないだろう、ふざけてるんじゃないの・・・？一瞬誰もがそう思うはずだが、それもデイビィッド・リンチ監督が観客を惑わすためのテクニックのうち・・・？

＜今野雄二氏のコラムは読みごたえあり！＞

今野雄二氏は『キネマ旬報』の「ＲＥＶＩＥＷ　２００７」で毎回４本の映画の評論と採点をしている映画評論家だが、彼の評論と採点は手厳しいのが特徴で、４本の映画がすべて４段階評価で星１つということもある。ちなみに２００７年１月から６月までの半期分で、「ＲＥＶＩＥＷ　２００７」の掲載がなかった２月下旬号をのぞいた１１冊について、その星の数を足してみると、計９７点になる。したがって、平均すると１本あたり２．２０点という厳しさ・・・。

また私の理解では、彼の評論の第２の特徴は好みや視点が明確なこと、そして第３の特徴は極めて理屈っぽいこと・・・。

『インランド・エンパイア』のプレスシートには、そんな映画評論家今野氏の「映画は夢、醒めてみる夢の、そのまた夢の映画」というコラムが載っている。そこでは「リンチに嫌がられようとも、野暮を承知で、『インンランド・エンパイア』のせめてもの輪郭だけでも掴みたい、という欲求をどうすることもできないのである」と断ったうえで、あえて彼なりのチャレンジ（解釈）をしているが、これがすごい。なるほどこのシーン狙いはこういう狙いだったのか、これはこういう意味だったのかということが、このコラムを読めば少しわかったような気に・・・。

もっとも、これはあくまで今野氏の解釈であり、どれが正解というものではないのは当然。ちなみにプレスシートにあるインタビューで、デイヴィッド・リンチ監督は「この映画に出てくる３匹のウサギについて説明してください」の質問に対して「それは出来ない」というつれない答え。これでは、私のようなデイヴィッド・リンチ監督映画の初心者がついていけないのは当然・・・。

＜タイトルの意味は・・・？＞

私はこの映画のタイトルをみて、最近はやりのバンパイア（吸血鬼）映画でイギリスを舞台としたものだと一瞬思ってしまったが、それは私の英語力の乏しさによるもの、すなわちこの映画は、「バンパイア」でもなければ「イングランド」でもなく、「インランド・エンパイア」。そしてこれは、南カリフォルニア州の地域名からとったタイトルとのこと。しかし、そんなことを知っている日本人はどこにもいないのでは・・・？

また「『インランド・エンパイア』は、ハリウッドを見下ろす山道を題名にした『マルホランド・ドライブ』（０１年）、「ハリウッド・バビロンを再び描いたという意味でも対となる作品である」とのこと。

こんな説明を読んでもなかなかわからないのだから、日本で上映する時は、サブタイトルでもいいから少しわかりやすい邦題をつけてほしいと思ったのは、私だけ・・・？

＜映像の勉強に最適・・・＞

この映画は①女優ニッキーの世界、②映画内映画『暗い明日の空の上で』のハリウッドサイド、③ロスト・ガールの世界、④映画内映画『４７』のポーランドサイド、そして⑤謎のウサギ人間たち、という５つの世界が３時間にわたって複雑に交錯するもの。またプレスシートには、「滝本誠、駒井尚文、北原香諸氏の協力により作った、あくまで便宜上のものである」と断ったうえで、『インランド・エンパイア』地図がのっている。

これを参考に、また今野氏のコラムを参考に、是非この映画についてのあなたなりの解釈や評論を書いてもらいたいが、残念ながら私にはその能力がなさそうだから、私は放棄・・・。

面白いのは、この映画ではあるシーンになると映像がガラリと変わること。これは随所にＤＶカムコーダーＳＯＮＹ　ＰＤ－１５０を使って撮影しているためだが、それによって混迷している５つの世界の混迷度がよけい進んでいくことに・・・。その意味で、この映画は映像の勉強には最適だと思ったが・・・。

＜裕木奈江の登場にひと安心＞

映画終了後、エレベーター前でこの映画を観た若者グループ７～８名が大きな声でしゃべっていたが、全編きちんと眠らないで観たのは１人だけで、約２名は爆睡ないし熟睡、そして残りの人も部分的に眠っていたらしい・・・。正直言うと、実は私も・・・？

そんな私でもはっきりストーリーが読め始めたのは、後半３分の１くらいになってから、とりわけラスト近くになって、見覚えのある日本人の顔が登場してから・・・。その時は気付かず、後でプレスシートを読んではじめてわかったのだが、実はこれが裕木奈江。日本人のしゃべる英語はわかりやすいもの。もっとも、Ａ地からＢ地までバスで行けることをなぜ必死になって説明しているのかはサッパリわからないが、とにかく、この時点ではどんなストーリーになっているのかについての理解はバッチリ・・・。

２００７（平成１９）年７月４日記